

小児がんに着目した「がん教育」 支援ツール（絵本）の開発

－「がん教育」授業の実施および評価－

Development of a Support Tool (Picture Book) for Cancer Education

Focusing on Childhood Cancer

－ Implementation and evaluation of "Cancer Education" classes －

森 口 清 美 ・ 大 見 サキエ

畑 中 めぐみ ・ 十 河 妹

鎌 森 亮 太 ・ 岡 本 瑞 己

山 部 英 之

小児がんに着目した「がん教育」支援ツール (絵本) の開発

－「がん教育」授業の実施および評価－

Development of a Support Tool (Picture Book) for Cancer Education Focusing
on Childhood Cancer

－ Implementation and evaluation of "Cancer Education" classes －

森 口 清 美 (教育心理学科)

MORIGUCHI Kiyomi

大 見 サキエ (椋山女学園大学)

OMI Sakie

畑 中 めぐみ (名古屋医療センター)

HATANAKA Megumi

十 河 妹 (就実小学校)

SOGO Mai

鎌 森 亮 太 (就実小学校)

KAMAMORI Ryouta

岡 本 瑞 己 (就実小学校)

OKAMOTO Mizuki

山 部 英 之 (就実小学校)

YAMABE Hideyuki

キーワード：がん教育、小児がん、復学支援、がん教育支援ツール

抄録

本研究の目的は、小児がんに着目した「がん教育」支援ツールとして作成した絵本のがん教育への効果と活用方法を検討することである。

学校における「がん教育」を、従来の大人のがんに加え子どものがんにも着目した教育プログラムに構築するため、がんの子どもへの理解を含めた「がん教育」支援ツール(絵本)を作成した。絵本は、小児がんを克服し復学した小学校2年生の子どもが小学校を卒業するまでの学校生活と子どもの心情を表し、病気をした経験を糧に自分の夢を見つける過程を描いたものである。

内容は復学当日の「おかえりなさいの会」から始まり、復学直後の保健室でのサポート、外来通院の事、校外学習での合理的配慮、感染予防について、学校の先生や友人から「どのような支援を得たのか」、「子どもはどのように感じていたのか」を理解できる構成になっている。

倫理委員会の承認後、A小学校の5年生を対象に担任が「がんの子どもの気持ちを想像し、自分で出来ることを考える」を目標にがん教育を実施し、無記名自記式アンケート調査で、自由記述式で回答を得た。回収した47名を分析した結果、「しんどいのに無理を

してしまう」気持ちと「他の子との違いを気にしてしまう」気持ちを、児童は想像しながら自分に置き換えて理解しようとしていた。また絵本の中にある友人と教員、母親による声かけを基に、自分で出来ることを考えていた。さらに児童は、主人公の退院後の状況や気持ちを共感的に理解しており、一定の効果があることが明らかになった。

今後、授業展開を修正すると共に、より効果的な活用方法を検討することが課題である。

I. はじめに

2016年にがん対策基本法が改正され、がんに関する教育の推進（第23条）が記載された¹⁾。これを受けて、第3期がん対策推進計画（2017～2022年）の目標として「がん患者を含めた国民が、がんを知り、がんの克服を目指す」ことが示された。文部科学省は「がん教育」の目標を「がんについて正しく理解する」「健康と命の大切さについて主体的に考える」と掲げ、具体的には「がん患者に対する理解と共生」を含めた9項目としている¹⁾。また新学習指導要領の下で「がん教育」は小学校では2020年度から全面实施され、中学校では2021年度から、高等学校では2022年度から必修化になり、がん教育の指導内容、教材の開発、医師の確保を含めた外部講師の活用方法も検討されてきた²⁾。

しかし文部科学省のホームページに掲載されている「がん教育推進のための補助教材」には小児がんの内容は絵本（友だち～ぼくとゆう君～）以外ほとんど見当たらない。さらに文部科学省が実施したがん教育の実施状況調査（2018年）³⁾によると、がん教育を実施した学校は、国公立37,169校中、23,023校（61.9%）だったが、内容は、大人のがん予防（84.8%）、治療法（86.0%）、がん検診（46.7%）が多く、小児がんに関しての報告ほとんどなかった⁴⁾⁵⁾。このような結果になった理由として、がんの予防の観点から生活習慣病に着目して授業展開をしている学校が多かったためだと考える。しかし筆者は「このがん教育に対して危惧の念を抱いている」と、小児がんを経験した子どもを持つ多くの保護者から聞いた。また、学校担任をしている教員からは「小児がんについて知らないことが多いため、話をするのは自信が無い」と聞いている。小児のがんは、生活習慣病とは関係なく特発的に発生するものであり、予防という観点からは説明できない。生活習慣病が「がんの要因」とであると教えられた場合、がん治療を行った子どもに対して「生活習慣を守っていなかった」という偏見の目を向けられる懸念がある。現在、がん患者の生存率は高まり、小児がんの治癒率も著しく向上し、社会復帰する子ども達が増加している⁶⁾。

文部科学省が、がん教育を「がんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育である」¹⁾と定義している様に、現在、小児がんも含めたがんという病気を偏見なく理解するための具体的な方策の検討が喫緊の課題となっている。このような観点から、小児がんの治療をしながら病気と闘っている子ども達が安心して学校生活を送るために、がんへの偏見をなくし子ども同士で支え合い、共に学んでいく啓発活動を

推進する必要があると考えた。そして、がんの子どもが周囲の児童からの理解と協力が得られる「がん教育」を実践できる状況を整備することが必要だと痛感し、小児がんに着目した「がん教育」プログラムを開発すべきだと考え、「がん教育」支援ツールとして絵本を作成した。

本研究で、がんの子どもへの理解を推進するツールを作成し、国内初の小児がんに着目した「がん教育」プログラムを開発することは、がんの子どもへの理解をより充実させることができ、「がん教育」を全国的に展開するためのサポートツールになりうると考える。

Ⅱ. 研究目的

小児がんに着目した「がん教育」支援ツールとして作成した絵本が小学生に対して活用できるか、その効果と活用方法を検討することである。

Ⅲ. 方法

1. 対象および期間

対象：A 小学校5年生2クラス47名

期間：2020年11月～12月

2. 調査方法

授業時の一斉配布による無記名の 自記式質問紙調査

3. 授業概要

1) がん教育で使用した絵本⁷⁾

白血病とたたかった子どもが復学した後のがんばりと成長を描いている。

病院を退院して久しぶりに学校に行った日の「おかえりなさいの会」から始まり、養護教諭、クラスメイト、担任からの合理的配慮を描いている。一方で、外来に行くために早退すること、脱毛のため帽子をかぶっていること、体力が戻っていないこと等、治療によっておこる困難も描いている。そして「みんなと同じようにしたい、特別扱いをしてほしくない」という主人公の気持ちを無理して体育を頑張ることで表現している。さらに、インフルエンザが流行し欠席している時に手紙をもらったり、途中から山登りをする事で一緒にゴールが出来たりした場面で、周囲への感謝を描いている。また気になっていた点滴の痕を相談することで頑張った印として誇りに思うようになり、さらに将来の夢を描けるようになったストーリーである。

図1 絵本

入院中から復学まで

復学から小学校卒業まで



2) 授業のねらい

A・Bクラスのそれぞれの担任が、授業のねらいを「相手の境遇から、立場や気持ちを想像し、尊重することを通して、思いやりを持った親切な行動を選択し実行したり、時には見守ったりすることで、互いに支え合える大切さに気付き、共存、共生の態度を育てる」とし、絵本を教材とした指導案を担任が作成し、45分間の道徳授業を展開した。

3) 本時までの流れ

本時の授業を展開する前に担任の先生が、一般的ながんについて、多様性を認めることについて、「おかえり！めいちゃん」と今回作成した退院後の生活を描いた「かがやけ！めいちゃん」を読み聞かせし、話の流れを事前につかんでいた。具体的な内容は以下に示す。

第1時に、映像教材「がんについての基礎知識」（平成29年3月 株式会社キャリアリンク）を視聴し、一般的ながんの知識を学んだ。

第2時に、がん教育読本「友だち～はくとゆう君～」(公益財団法人日本対がん協会)、入院中の闘病生活を描いた「おかえり！めいちゃん」を読み聞かせ、小児がんの子どもが入院するイメージを持つように促した。

第3時には、人は自分と違って当たり前であり、病気や障害を含めた多様性を受け入れるために、いじめをノックアウト「あいつ変じゃね」って変じゃね？～悪口をなくすヒント～(NHK)を視聴させ、「自分の中にある変」を考えさせた。その後「かがやけ！めいちゃん」の読み聞かせを行い、①自分がめいちゃんだったら、友達にどのようにしてほし

いですか（表1）②絵本を読んで一番心に残っていることは何ですか？（表2）の質問紙調査を実施した。

4）本時の授業展開

＜導入＞白血病という病気についておさらいをする。

絵本の内容を振り返り、自分が印象に残っていた場面を想起する。

＜展開＞主人公の気持ちを考える（2つの場面を選択）。

主人公にどのように接したいかを考える。

＜結末＞授業で学んだこと、今後に活かしたいことを感想にまとめる。

＜導入（10分）＞

（1）絵本「かがやけ！めいちゃん」の内容を振り返る。

時・場所・人物（中心人物；めい）・出来事（あらすじ）を想起する。

白血病（血液）の癌について、おさらいする。（知識の確認）

（2）特に印象に残った場面について理由もあげて、発表する。

（3）（2）で取り上げた場面を基に、本時に注目する2つの場면을提示する。

①の場面 P16～18

「3年の夏のある日、階段ですわりこむめい～体育で無理をするめい」

②の場面 P24～25

「5年生になったある日、点滴のあとが気になるめい」

（4）本時のめあてを提示する。

「めいちゃんの気持ちを想像し自分にできることを考えよう」

＜展開 ①の場面12分+②の場面16分＞

（5）①の場面

2年生の3月に復学した主人公（めいちゃん）が、3年生になった夏のある日、三階の図書室に行く途中、階段ですわりこんでしまった。友達のあいちゃんが、「だいじょうぶ？カバン持とうか？」と声をかけたが、「大丈夫！平気だよ」と辛いのにながら言ってしまった場面と体育を無理して頑張ってしまった場면을提示して、主人公がなぜ無理をしたのか、理由を考えさせた。また、「無理をするめいちゃん」の気持ちを児童が広い視野に立って考えられるように、思考に揺さぶりをかける以下のような発問をした。

担任「なぜ無理をしたのだろう？考えて書いてみましょう」

「まだマスクもしているし、しんどいはずだよね？」

「手伝ってもらったら、楽なのにね」

児童「クラスの子に迷惑をかけたくない」「自分だけ違うのは嫌だ」

「友達負担になりたくない」「みんなと同じようにしたい」

「追いつきたい」「くやしい」「特別扱いは嫌だ」

次に、A組では、「あなただったら、めいちゃんにどのように声をかけるか」という問いかけを行い、B組では「あなたがめいちゃんだったら、助けてもらうか」という問いかけを行った。

A組担任「あなたがまわりの友達だったら、どういう声かけをしますか？」

どうしますか？」「色んな気持ちを抱えているめいちゃんに、
あなたならなんて声をかけますか？」

→ペアで話し合い（2分間）、発表をする。

児童「大丈夫、無理しなくてもよいよ」「持ってあげようか？」

「ゆっくり一緒にいこう」

「保健室の先生に後から言ってあげようか？」

B組担任「もしあなたがめいちゃんだったら、どうしますか？」

→ワークシートに書いた後、隣同士で話し合い（2分間）、発表する。

児童「無理をして体を壊したくないから、手伝ってもらう」

「みんなと一緒にになりたいというプライドがあるから、手伝ってもらわない」

「自分だけ出来ないのがくやしい」

（6）②の場面

5年生になっためいちゃんが外来時、主治医から心配なことはあるかと尋ねられ、「点滴のあとがもり上あがっていて、はずかしいんだ。プールに入るのはいやだな。」と言うと、「これは、めいちゃんががんばった印だよ。」と、主治医と母親に言われた場面を提示した。そして、「点滴のあとを気にするめいちゃん」について考える際、他者にあまり知られたくない経験はないかを尋ね、児童の思考に揺さぶりをかけた。

担任「治療の痕が残っていて、どうして気になるのかな？」

「みんなも人に知られたくない、気になることはありますか？」

→担任は、気になる人と気にならない人に理由を聞く

気になる児童「みんなと違う気がするから」

気にならない児童「みんなと違ってても良いと思う」

担任「立場をかえて、めいちゃんはどうして気にしたのでしょ？」

→自分の意見をプリントに記入してペアで話し合い、発表する。

児童「違うから、友達に分かるとからかわれたりしそう」

「同じがいいのに、自分だけ点滴の痕があるのが嫌」

<結末7分>

（7）本時の振り返りを行う。

めあてを想起させ、ワークシートに本時の授業を通して考えたことを書く。

担任「2つの場面を通して学んできて、自分だったらどうできるのだろう

と考えてみてください」

→グループで机を付けて、話し合う（4分）

児童「違う人がいたら、出来ることはできる限りしたい」

「普通に接することが大切」

「助けるにしてもいつがいいのか考えてみて困っていたら助けたい」

「からかわない」

「無理やりはしないほうがよい」

「本人が気にしているからこそ、周りは気にしない方がよい」

（8）まとめ：担任が近視眼でメガネが厚く、嫌だった経験談を話す

「今、相手がどんな気持ちか、友達にとってもものすごい違いであることを想像してみ、相手のことを考えられる人であってほしいと思います。」

「放置することはいけない。みんなチームであり、自分たちにできることを考えよう」

図2 学習指導案

指導案作成

授業者 鎌森 亮太・岡本 瑞己

1. 主題名

相手の立場や気持ちを想像し、親切にする（支え合う）

2. 資料名「かがやけ！めいちゃん（白血病とたたかった子どもが復学してから）」（出典 ふくろう出版）

3. 本時のねらい

相手の境遇から、立場や気持ちを想像し、尊重することを通して、思いやりを持った親切的な行動を選択し実行したり、時には見守ったりすることで、互いに支え合える大切さに気づき、共存、共生の態度を育てる。

4. 単元の活動（本時までの流れ）

時数	学習内容
第1時 (モジュールタイム)	・映像教材「がん博士の『がんについての基礎知識』」（平成29年3月 株式会社キャリアリンク）を視聴し、がんという病気を知る。
第2時 (モジュールタイム)	・がん教育読本「友だち〜ぼくとゆう君〜」（公益財団法人日本対がん協会）、「おかえり！めいちゃん（白血病とたたかった子どもが学校にもどるまで）」（ふくろう出版）の読み聞かせを行い、小児がん患者と接することについて考える。
第3時 (モジュールタイム)	・いじめをノックアウト「あいつ変じゃね？」って変じゃね？（NHK）を視聴する。 ・「かがやけ！めいちゃん（白血病とたたかった子どもが復学してから）」を読み聞かせし、話の流れをつかむ。特に印象に残った場面とその理由を書く。
第4時 【本時】	・「かがやけ！めいちゃん（白血病とたたかった子どもが復学してから）」を使って、相手の境遇から、立場や気持ちを想像し、尊重することを通して、思いやりを持った親切的な行動を選択し実行したり、時には見守ったりすることで、互いに支え合える大切さに気づき、共存、共生の態度を育てる。

5. 本時の展開

	展開・学習活動	学習形態	◇教師の支援 ○評価
導入 (10分)	<p>1. 物語の内容を振り返る。 時・場所・人物（中心人物；めい）・出来事（あらすじ）を想起する。 白血病（血液）の癌について、おさらいする。（知識の確認）</p> <p>2. 特に印象に残った場面について理由もあげて発表する。 【教】：教師 【児】：児童 【教】「特に印象に残った場面は？理由も加えて教えてください。」 【児】「印象に残った場面は～です。なぜなら…」 【児】「ぼくは、～の場面が印象に残りました。だって…」</p> <p>3. 2で取り上げた場면을基に、本時に注目する2つの場면을提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>（本時のめあて）①②の場面でのめいちゃんの気持ちを想像し、自分にできることを考えよう。</p> </div> <p>① P16～18「3年の夏のある日、階段ですわりこむめい～体育で無理をするめい」 ② P24～25「5年生になったある日、点滴のあとが気になるめい」</p>	<p>ペア（確認）⇒ 全体（共有）</p> <p>全体（共有）</p> <p>全体（共有）</p>	<p>◇ プロジェクターに物語全体の各場面（シーン）を提示する。 ◇ 児童用 iPad の物語 PDF 資料を確認してもよいと伝える。 （他の学習活動も同様）</p> <p>◇ 第3時に予め記入させておき、児童がどの場面に注目しているか確認しておく。 ◇ 理由を説明することに困り感のある児童がいた場合、他の児童に「どうしてその場面を選んだのだと思う？」と問いかけ、発言させる。</p> <p>◇ たくさんある場面の中でも、特に児童に考えさせたい2つの場면을提示する。（①の場面は、めいの立場に共感して考えることができる。②の場面は、同じ5年生として、めいの気持ちを想像して考えることができる。）</p>
展開① (12分)	<p>4. ①の場面で、無理をするめいについて考える。 ※1 【教】「しんどいなら手伝ってもらえばいいのにね。」 【児】「いやいや、それは違って…」 ※2 【教】「じゃあ、こういう時は、親切なことは言ったり、したりしない方がいいんだね。迷惑なんだね。」</p>	<p>個人（記入）⇒ ペア（共有1）⇒ 全体（共有2）</p>	<p>◇ 記入する前に※1のように問いかけることで、児童が考えやすいようにする。 ◇ 全体共有の際、※2のような発問をすることで、児童の思考に揺さぶりをかけ、より広い視野に立った思考を促す。 ○ 辛くても自分のことが自分でやろうとするめいの思いに寄り添って自分の考えを書いたり、話したりしている。 【ワークシート・発言】 A－（5）「希望と勇気、努力と強い意志」 B－（7）「親切、思いやり」 B－（11）「相互理解、寛容」 D－（19）「生命の尊さ」</p>

展開② (91分)	<p>5. ②の場面で、点滴のあとを気にするめいについて考える。</p> <p>※3</p> <p>【教】「せっかく元気になったのに、どうしてこんなこと気にしているんだろう？気にするなんておかしいよね。」</p> <p>【児】「点滴のあとは、このページのあとにも書いてあるように、がんばった印だけど、やっぱり他のみんなに見られると何か言われたり、そうでなくても自分が恥ずかしく思ったりするんじゃないかな。」</p>	<p>個人（記入）⇒ ペア（共有1）⇒ 全体（共有2）</p>	<p>◇ 点滴のあとが盛り上がることに、実際の写真を見せることでイメージを抱きやすいようにする。</p> <p>◇ 個人で記入する前に、※3のような発問をすることで、児童の思考に揺さぶりをかけ、より広い視野に立った思考を促す。また、間違った考え方もあることを暗示する。</p> <p>◇ 困り感のある児童には、他者にあまり知られたくないと思うような経験をしたことがないか尋ね、思考を促す。</p> <p>○めいの気持ちに共感し、自分にとっては気にならないことであっても、他者にとってはそれが心に引っかかることもあることを書いたり話したりしている。</p> <p>【ワークシート・発言】</p> <p>B－（7）「親切、思いやり」</p> <p>B－（11）「相互理解、寛容」</p> <p>D－（19）「生命の尊さ」</p>
結末 (1分)	<p>6. 本時の振り返りを行う。</p> <p>めあてを想起させ、ワークシートに本時の授業を通して考えたことを書く。</p>	<p>個人（記入）⇒ 全体（共有）</p>	<p>◇がん教育に関連した児童に配慮するため、全体での発表は、児童の意思を尊重し、発表した児童のみにとどめる。</p> <p>○本時の内容（がん教育を含む道徳教育）を受けて、中心人物の気持ちを尊重した上で、親切にすることの大切さを理解したり、相手の境遇や立場を俯瞰して捉えたりすることで、共存・共生について考えることができている。</p> <p>【ワークシート・発言】</p> <p>B－（7）「親切、思いやり」</p> <p>A－（5）「希望と勇気、努力と強い意志」</p> <p>D－（19）「生命の尊さ」</p> <p>B－（11）「相互理解、寛容」</p>

【参考1】

おかえり！めいちゃん（絵本）



【参考2】

かがやけ！めいちゃん（絵本）



【参考3】

がん教育読本「友だち～ぼくとゆう君～」



4. データ収集方法及び分析方法

データは授業中、A 4 様式 1 枚にワークシートとして記載しながら学習を行い、提出されたものを児童からの同意が得られたものとした。各担任が回収したものを匿名化した後、クラス毎にデータを入力した。

1) 事前授業時のアンケート




- (1) 絵本を読んで一番心に残ったこと
- (2) 絵本を読んでわかったこと

2) 本時の授業時のアンケート (ワークシート)

- (1) 友達から気づかいの声かけや「無理しないで」と言われても、無理をしてがんばろうとしたのはなぜでしょう。
 - ① めいちゃんはなぜ無理をしたのだろうか？
 - ② あなたなら、めいちゃんになんと声をかけますか？(A組)
もしあなたがめいちゃんだったら助けてもらいますか？(B組)
- (2) 5年生になっためいちゃんは、点滴のあとがもりあがっていることをどうして気にしていたのでしょうか。
 - ① あなたがめいちゃんの立場なら、気にしますか？
 - ② めいちゃんは どうして気にしていたのだろうか？
- (3) 今日の授業を通して、自分ができることを書きましょう。

上記の記述式回答は、意味内容の類似性、相違性にしがって、質的帰納的に整理し、妥当性・信頼性を確保するため研究者間で検討した。

図3 ワークシート

五年生 横倉	<h2 style="margin: 0;">かがやけーめいちゃん</h2> <p style="margin: 0;">細 藤 名留</p>	
<p>【解説】「かがやけーめいちゃん（田目繁うただわったけいおなを敬慕したわら）」</p> <p>①（16～18ページ）校舎から、返りわたる祖めいちゃん「無理になった」と言わたりや、無理をしたらとてめいちゃんにたのめいちゃん。</p>		
<div style="border: 1px solid black; height: 60px; margin-bottom: 10px;"></div> <p>めいちゃんばなぜ無理をしたらたのめいちゃん。</p>		
<div style="border: 1px solid black; height: 60px; margin-bottom: 10px;"></div> <p>もし「あなた」がめいちゃんなら。</p>		
<p>②（24ページ）五年生になっためいちゃんば、てしおのめいちゃんにたのめいちゃん。</p> <p>◇あなたがめいちゃんの立場なら、気にしますか？</p> <p style="text-align: center; margin: 10px 0;">気になる ・ 気にならない</p>		
<div style="border: 1px solid black; height: 80px; margin-bottom: 10px;"></div> <p>「めいちゃん」はえいちゃんにたのめいちゃん。</p>		
<p>③今日の授業を聞いて、自分なりに思ったことを書けいちゃん。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 20px; height: 120px; margin-top: 10px;"></div>		
		

5. 倫理的配慮

所属大学の倫理委員会に諮問し、承認を得て実施した（承認番号、就実大第 2020-16 号）。A 小学校の学校長に研究の主旨を記載した依頼文、絵本、アンケート調査票を用いて説明した後、同意を得て実施した。学年、クラスについては学校長の判断に一任し、がんで療養した経験のある子どもが在籍しないクラスとした。依頼文には研究の目的と意義、協力内容、倫理的配慮について記載した。倫理的配慮として、研究協力の任意性、守秘義務、データの管理、学会等での公表、連絡先等を記載した。対象となる児童に対しては、授業開始時に趣旨を説明し、アンケート調査は無記名とし、回収をもって同意が得られたものとするすることで、個人の人権保護をはかった。また、授業によって子どもたちが不安定な精神状態にならないように子どもの疑問には十分答えるように努め、教員には様子を観察してもらい、適切な対応を依頼した。

IV. 結果

アンケートの回収は2クラス（23名と24名）47部であり、記述された内容を整理、分析した。なお、記述された内容のカテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>で示す。

1. 読み聞かせ時のアンケート結果

事前学習として読み聞かせを行った後のアンケート結果を質問毎に整理した結果、「自分が主人公だったら友達にどうしてほしいか（表1）」は、3つのカテゴリーに分類された。<気にしないで><優しく見守ってほしい>などの【がんになる前と同じように接してほしい】と回答した児童が多かった（28名）が、<困ったときに話を聞いてほしい>などの【苦しくなった時に助けてほしい】や【色々なことを手伝ってほしい】という意見も見られた。なぜ普段通りに接してほしいかという理由として、みんなと同じようにしたいし、心配かけたくないという気持ちが記載されていた。また、<他の人と違うことがあっても受け入れてほしい>、<何も言わないでほしい>という具体的な配慮を求めている。

「絵本を読んで一番心に残ったこと（表2）」は、7つのカテゴリーに分類された。【復学した日のドキドキと嬉しい様子】から始まった絵本だが、【みんなが主人公のために配慮をしているところ（感染予防）】、主人公も掃除を自分で考えたり、山登りに挑戦したり、体調がすぐれないのに体育をしたり、【学校生活の中で懸命に頑張っていたこと】を児童は心に残っていた。そして、主人公が次第に出来ることが多くなって、【よろこんでいた様子（白血病が治った・卒業できた・山に登った）】だけでなく、「なぜ帽子をかぶっているの?」と【帽子の事をきかれたこと】や【みんなと同じようにしたいという思いを伝えたところ】など、主人公にとってつらい場面も印象に残っていた。また絵本の最後にある【将来の夢を語っていたこと】は、自分も同じ経験したら主人公のように考えるからという理由を挙げていた。

表1 主人公の立場だったら友達にどうしてほしいか

カテゴリー	サブカテゴリー
がんになる前と同じように接してほしい（28名）	同じように接してほしい・普通に接してほしい
	たまに大丈夫？位の声掛け
	ほっといてほしい・優しく見守ってほしい
	気にしないでほしい・髪の毛の事を気にしないでほしい
	変なことを言わないでほしい・笑わないでほしい
苦しくなった時に助けてほしい（7名）	きつい時にランドセルを持ってほしい
	困ったときに話を聴いてほしい
	体調をきにしてほしい
色々なことを手伝ってほしい（12名）	優しくしてほしい
	色々と手伝ってほしい
	朝の会や帰りの支度を手伝ってほしい
	風邪をひかないように対策してほしい

表2 絵本を読んで一番心に残ったこと

カテゴリー	サブカテゴリー
将来の夢を語っていたこと	病気の子供たちを助ける人になりたいと決めたこと
	卒業式で夢を見つけたこと
復学した日のドキドキと嬉しい様子	教室にドキドキしてながら戻ってきたこと
	友だちがめいちゃんを忘れていなかったこと
帽子の事をきかれたこと	「どうして帽子をかぶっているの」と聞かれたこと
	思い切って髪の毛の事を説明したこと
めいちゃんが頑張っていたこと （山登り・体調がすぐれないのに体育をした・掃除）	強がって、つらいことをかくして頑張ったこと
	自分で掃除をかんがえていたこと
	めいちゃんが山登りや体育を頑張っていたこと
めいちゃんがよろこんでいた様子 （白血病が治った・卒業できた・山に登った）	白血病が治って喜んでしたこと
	いろいろあったけど卒業できたこと
	集合写真を撮っているところ
	山にみんなと一緒に山頂まで行けたこと
みんなと同じようにしたいという思いを伝えたところ	「わたしやれます」といったところ
	同じようにしたいけど出来なかったところ
みんなが感染予防をしているところ （換気・マスク・手洗いをする）	みんなが風邪をひかないようにしてくれているところ
	みんなが手洗いをしようとしているところ

2. 本時のアンケート結果

1) ①の場面

「主人公はなぜ無理をしたか（表3）」は、4つのカテゴリーに分類された。無理をして頑張ろうとした理由として、【自分も出来る】【みんなと違うのは嫌だ】というみんなと同じように自分でしたいという思いと【心配かけたくない】【特別扱いされたくない】という友達に対する思いが挙げられていた。

「主人公にどのような声かけをするか（表4）」は、6つのカテゴリーに分類された。【大丈夫?】【無理しなくてもいいよ】【遠慮なく言ってね】という気遣いと【少し休もうか】【先生に伝えてこようか】【一緒にゆっくり行こう】という具体的な支援が挙げられた。

「主人公の立場だったら、助けてもらうか（表5）」は、「助けてもらう」と回答した児童は14名、「助けてもらわない」と回答した児童は9名であった。また、助けてもらう理由は4つに分類され、無理をすることで【病気を悪化させたくない】、出来ないことがあっても【一人一人違って良いから】という自分自身に対する思いと【友達に心配かけるから】【手伝ってもらうことに感謝】という他者への気遣いが挙げられていた。さらに、助けてもらわない理由は3つに分類され、【恥ずかしい】【悔しい】という自分自身に抱く思いと【特別扱いされたくない】という他者に向けた思いが挙げられていた。

2) ②の場面

「主人公の立場だったら、点滴の痕は気にするか（表6）」では、気にする子は26名、気にならない子は21名であった。

また「主人公はどうして点滴の痕が気になったのか（表7）」の回答は、【からかわれるかもしれない】【人に聞かれるのが嫌】という人から何かされることを嫌がっている場合と【みんなと違うのは嫌】【自分でも痕が気になる】【恥ずかしい】という自分自身への思いから嫌がっている場合があった。さらに、「点滴の痕が気になる」と答えた児童は、【嫌な治療を思い出すから】という理由も記載していた。

「復学してきた子へあなたが出来ること（表8）」は、5つのカテゴリーに分類された。【出来ていない時に助けて、特別扱いほしくない】【そばにいて、支える】【話をきいて、相談にのる】など、求められている時に必要な支援をすること、【からかう人を注意する】、【病気の事は言わない】など、いじめへの配慮が記載されていた。

表3 主人公はなぜ無理をしたか（複数回答）

カテゴリー	サブカテゴリー
特別扱いをされたくない（27名）	友だちと同じように生活したい
	同じように接してほしい
	同じように過ごしたい
	みんなと一緒にしたい
	みんなと同じ立場に立ちたい
心配をかけたくない（23名）	心配かけたくない
	余計な心配をされたくない
	迷惑をかけたくない
	苦勞させたくない
	負担をかけたくない
自分も出来る（10名）	自分で出来ることを強調する
	自分も出来る
	自分だけの力で活動したい
	手伝ってもらったら、甘えてしまう
	体力をつけてみんなに追いつきたい
くやしいし恥ずかしいし嫌だ（10名）	自分で頑張りたい
	みんなと違うのは嫌
	自分だけ出来ないのが嫌
	違う目で見られるのが嫌
	病気が恥ずかしいから
	病人と思われてしまうから
	また病院に連れていかれる
	違うことを実感させられる

表4 主人公にどのような声掛けをするか（A組）

カテゴリー	サブカテゴリー	
大丈夫？	大丈夫？と聞いて、めいちゃんのペースに合わせる 大丈夫？と優しく声をかける	気遣い
無理しなくていいよ	無理しなくていいよといって、バックを持ってあげる	
遠慮なく言ってね	遠慮なく言ってね 本当のことを言ったらどう？	
少し休もうか	身体を少し休めてから進もう	支援
	保健室で休もうか	
	保健室に連れていく	
先生に伝えてこようか	保健の先生に後から言う	
	先生に言わなくても大丈夫	
	先生に伝えようか	
一緒にゆっくり行こう	手をつないであるく	
	肩を組んで一緒にあるく	
	頑張るんだ！といってゆっくり一緒に行く ゆっくり一緒に行こう	

表5. 主人公の立場だったら助けてもらうか (B組 23名)

カテゴリー		サブカテゴリー
助けてもらう (14名)	病気が悪化したくない	学校にいる時、元気がなくなるから、病気になるったら困るから 身体を壊したらこまるから、体にあった生活をすればよいと思うから プライドを捨てる、辛いのを我慢しなくても良い、体調が悪くなりたくないから
	1人1人違って良いから	1人1人は違っていいから、 自分の身体にあった生活をすればよい
	友だちに心配かけるから	体調が悪いと友達に心配かけてしまうから 辛いのをがまんしなくてもいい
	手伝ってもらうことに感謝	きついし、手伝ってくれるのは感謝してもいいから
助けてもらわない (9名)	特別扱いをされたくない	特別扱いはしてほしくないから みんなと一緒にしたい (プライド) みんなみたいに生活したい みんなと同じように出来ることを証明したい
	恥ずかしい	手伝ってもらうのは恥ずかしい 心配かけたくないから 頼ってはいけないと思う
	悔しい	同じことが出来ないと悔しいから

表6. 主人公の立場だったら、点滴の痕は気になるか

気になる	26名
気にならない	21名

表7. 主人公はどうして点滴の痕が気になったのか

「点滴の痕が気になる」と答えた児童		「点滴の痕が気にならない」と答えた児童	
カテゴリー	サブカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
みんなと違うのが嫌	みんなと違うとはずかしい 同じになりたいのに出来ない 自分だけがうとおもってしまう みんなと同じがいい	みんなと違うのが嫌	自分だけ点滴の痕があるのが嫌 1人だけ違うから みんなにないものが自分にあるから おなじがいい
	いじめられそうだから 裏でからかわれるかもしれない みんなと違うと笑われる 変な人と思われる 目を付けられる からかわれるかもしれないから		からかわれるかもしれない いじめられるかもしれない 何か言われるかもしれない プールの時に恥ずかしい 点滴の痕が広まってしまう 変におもわれる みんなと違うと笑われるから 痕が気になってプールに集中できない
自分でも痕が気になる	プールに入るのが嫌になる 服を着る時に違和感を感じてしまうから 自分も触ってしまう	自分でも痕が気になる	
人に聞かれるのが嫌	友だちにそれなに？と聞かれたら、悲しくなるから 人に聞かれたらどうしよう 中高になった時に、聞かれそう 他の人に悪口を言われるかも どうしたの？それなに？と聞かれるのも嫌	人に点滴の痕の事を言われたくない	何か言われたら怖い
	自分だけあるのが恥ずかしい 首元で見えやすいから 頑張った印だけど、人に見られると恥ずかしい 思春期だから周りの目が気になる 人の目をきにしてしまう 周りに傷跡を見られてはずかしい みんなと一緒にになりたいので、小さなことでも恥ずかしい		治っていないと思われるかも 治っていないと思われるかも
嫌な治療を思い出すから	病気の事を気にしてしまい悲しくなる 治療の事を思い出すから		

表8. 復学してきた子へ「あなた」が出来ること

カテゴリー	サブカテゴリー
出来ていない時に助けて、特別扱いほしくない	困っていた時は助ける
	出来なさそうなことを手伝う
	金曜日（週末は疲れるから）は荷物を持ってあげる
	みんなと違うことは気にしない
	少しの違いは気にしない
傍にいて、支える	気にしてあげない
	支える
	お手伝いをする
	状況によって接し方を変える
	一緒にいる
話を聴いて相談にのる	無理やりにならせない
	気にかける
	はげます
からかう人は注意する	心配事があったら、聞いてあげる
	優しく声をかける
	人をばかにしない
病気の事は言わない	からかわない
	からかわれていたら、励ます
	余計なことは聞かない
	違うことがあっても何も言わない

V. 考察

1. がんの子どもの気持ちを理解するための絵本の妥当性

今回、白血病とたたかった子どもが復学した後のがんばりと成長を描いた絵本の中から2つの場面を取り上げて、「がんの子どもの気持ちを想像し、自分で出来ることを考える」を目標に、5年生47名に対し担任が授業を展開した。その結果「しんどいののに無理をしてしまう」気持ちと「他の子との違いを気にしてしまう」気持ちを、児童は想像しながら自分に置き換えて理解しようとしていた。

がんの子どもの気持ちを児童が理解できた要因を、絵本の構成、授業で取り上げた場面、単元の活動の工夫（本時までの授業の流れ）、ワークシートの工夫（思考の順番）と担任の声かけの側面から考察する。

（1）絵本の構成と授業で取り上げた場面については、この絵本は、ページごとに場面設定を行い、主人公が各場面でどのような気持ちになるか想像できるようにテーマを設けた構成になっている。今回取り上げた「しんどいののに無理をしてしまう」場面では、主人公は【自分もできる】と思っているし、みんなから【特別扱いされたくない】ため、「しんどいののに無理をしてしまう」のだろうと、児童は想像していた。また、みんなと同じような生活が出来なかったら、主人公は【くやしいし恥ずかしいし嫌】だろうと児童は想像していた。一方で、半数近くの児童（23名）は、クラスメイトに迷惑や負担、心配をかけた

くないと感じているだろうと記載していた。

もう一つの「他の子との違いを気にしてしまう」場面では、点滴の痕を【みんなと違うのが嫌】【自分でも痕が気になる】【恥ずかしい】と、自分自身の身体を他の子と比較して嫌がっているのではないかと児童は想像していた。また【からかわれるかもしれない】【人に聞かれるのが嫌】だという他者からの被害を恐れていると想像していた。さらに、【嫌な治療を思い出すから】という闘病をマイナスの経験として捉える記載もあった。

エリクソンの心理社会的発達理論⁸⁾によると、学童期の発達課題は勤勉さ対劣等感であるため、児童は「自分にはできない、みんなに迷惑をかける」と劣等感を抱きやすいといわれている。今回の場面である「しんどいののに無理をしてしまう」、「他の子との違いを気にしてしまう」は、みんなと同じがいい、自分も出来ると思っている学童期に特有の「劣等感を抱きたくない」気持ちの表出であるため、5年生の児童は想像しやすかったと推測された。

この絵本は、学童期の発達課題「勤勉性と劣等感」を考える場面を多く描いている。「自分が出来る係活動や掃除を考える」「途中から山登りをする事で一緒にゴールが出来た」「脱毛のため帽子をかぶっていることを説明する」場面によって勤勉性を、「外れに行くために遅刻や早退する」「運動場でする朝の会に出られず、保健室で休む」「階段を上がれず、うずくまる」「体育を無理に頑張ってしまう」場面で劣等感を考える機会になるため、がんの子どもの気持ちを理解する場面を適時選択することが可能である。またこの絵本は、がんを経験した子どもの経験談を基に作成しているため、子どもの気持ちにリアリティがあり、想像しやすいと考える。

(2) 単元の活動の工夫(本時までの授業の流れ)は、本時の授業を展開する前に担任の先生が、「一般的ながんについて」、「入院している小児がんの子供について」、「病気や障害を含めた多様性について」の事前学習を行っていた。その後「かがやけ! めいちゃん」の読み聞かせを行い、「自分が主人公だったら、友達にどのようにしてほしいですか(表1)」、「絵本を読んで一番心に残っていることは何ですか?(表2)」の質問紙調査を実施していた。本授業は2度目の読み聞かせだったため、主人公の気持ちを想像しやすかったと思われる。

(3) ワークシートの工夫(思考の順番)と担任の声かけについて検討する。ワークシートには、「めいちゃんはなぜ無理をしたのだろうか?」という主人公の気持ちを問う質問の次にA組は「あなたなら、めいちゃんになんと声をかけますか?」という支援者の立場に立って考える問いかけを行っていた。ここで児童は、主人公の立場から支援者の立場へ移行したと考えられる。一方B組は、「もしあなたがめいちゃんだったら助けてもらいますか?」という主人公の気持ちを引き続き問っていた。この様に主人公の立場のまま場面

②の「他の子との違いを気にしてしまう」気持ちを問う方が、児童は想像しやすいと思われる。しかし今回は調査した人数にも限りがあり厳密に検討できていないため、効果は予測できない。担任は「まだマスクもしているし、しんどいはずだね?」「手伝ってもらったら、楽なのにね」と児童の思考に揺さぶりをかけるような発問を随時していた。これらの問いかけが主人公の気持ちを広い視野に立って児童が考えられた要因だと思われる。

以上のことから、この絵本は学童期のがんの子どもの気持ちを理解するために、単元の活動やワークシートの工夫をしながら活用できる教材の一つであると考ええる。

2. 自分ができていることを考える機会

今回の授業の目的は、「めいちゃんの気持ちを想像し自分にできることを考えよう」であったため、多くの児童が主人公の気持ちを想像した後、自分で出来ることを提示出来ていた。【出来ていない時に助けて、特別扱いはいらない】【そばにいて、支える】【話をきいて、相談にのる】など、求められている時に必要な支援をするだけでなく個性を支援したいと考えられていた。また【からかう人は注意する】、【病気の事は言わない】など、辛くなる状況を想像して、自分が出来る支援を考えていた。

がんの子どもへの支援を考えることができた要因を、絵本の構成、授業で取り上げた場面、単元の活動の工夫（本時までの授業の流れ）の側面から考察する。

（1）絵本の構成では、場面ごとに養護教諭、クラスメイト、担任からの支援を具体的に提示している。絵本の中で、養護教諭は「しんどい時は保健室で休むように促し」、「帽子をかぶっていることを説明する練習を一緒に行い」、クラスメイトは「しんどそうな時に声を掛け」、「感染予防を自主的に行い」、「遠足時は一緒に山に登り」、担任は「掃除や委員決めの配慮を行い」、「無理して頑張った時は保護者へ連絡し」、「感染症による欠席時は家へ手紙を持参する」対応を主人公の感情と共に伝えている。

今回の授業で取り上げた場面「しんどいのに無理をしてしまう」「他の子との違いを気にしてしまう」でも、クラスメイトと医療者、母親による声かけを基に、児童は「自分だったらなんて声をかけようか」と考えることが出来たと思われる。

（2）単元の活動の工夫（本時までの授業の流れ）では、担任は事前に動画視聴をさせ、病気や障害を含めた多様性を受け入れる機会を設けていた。また担任自身の近視眼の経験談を話したり、「相手がどんな気持ちか、友達にとってものすごい違いであることを想像してみて」と問いかけたりした工夫も＜みんなと違うことは気にしない＞＜少しの違いは気にしない＞という【出来ていない時に助けて、特別扱いはいらない】の考えを導いたと思われる。

3. がん教育支援ツールとしての効果と課題

2016年にがん対策基本法が改正され、第3期がん対策推進計画（2017～2022年）の目標として「がん患者を含めた国民が、がんを知り、がんの克服を目指す」ことが示されている⁹⁾。今回実施した小児がんに着目したがん教育では「がん患者に対する理解と共生」の内容を主に展開したため、文部科学省が掲げている「健康と命の大切さについて主体的に考える」¹⁾の「がん教育」の目標を達成することが出来たと思われる。

「しんどいのに無理してしまう」「点滴の痕が恥ずかしくてプールに入りたくない」2つの場面から主人公の立場に立って、気持ちを想像する授業を展開した。はじめは点滴の痕を気にしないという子どもが多かったが、担任の問いかけと周りの人と交流することで、主人公の気持ちを理解できるようになっていた。担任が投げかける問いと子ども同士の意見交換が重要であることが明らかになった。

狙いのひとつである「相手の気持ちを想像する」は、みんなと一緒にしたい、心配かけたくない、恥ずかしい、みんなと違うことが嫌だという主人公が感じている気持ちをイメージすることが出来ていた。

「思いやりを持った親切な行動を考える」は、困ったときに助ける、気になることは言わずにそっと見守る、からかわない、と主人公にどのように接したいか、という行動も考えられていた。今回の結果は、入院中を描いた「おかえりめいちゃん」¹⁰⁾による読み聞かせの効果と同様の結果だった¹¹⁾。

がん教育の内容の一つである「がん患者への理解と共生」の目標は、概ね達成できたと考えられる。

VI. 研究の限界と今後の課題

対象が1校2クラス5年生のみであったため、一般化はできず、さらに対象学年を拡大し、検証していく必要がある。また絵本によるがん教育は一定の効果があつたが、授業の組み立てが影響すると考えられるため、今後は、どの支援ツールをどの順番で使用するのか、プログラムとして精査する必要がある。「がん教育」を主体的・対話的な深い学びにする¹²⁾ためには、ディスカッションや視聴だけでなく、劇や教え合うグループワークなど主体的に参加できる実施方法を考案する必要がある。また、今後は小・中の学校種別に「がん教育」支援ツールをどのような組み合わせで授業展開をすればよいのか、具体的なプログラムを考案し、実践・評価して修正していく必要がある。

VII. 結論

がんに対する正しい知識と認識を目指している「がん教育」の中で、小児のがんの子どもが周囲の児童からの理解と協力が得られるような「がん教育」プログラムを考案することを目的として、A小学校の5年生を対象に、計4回の「がん教育」を行った。

復学後の学校生活を描いた絵本「かがやけ！めいちゃん」は3回目の読み聞かせと4回目の授業で使用した。がん教育の内容の一つである「がん患者への理解と共生」の内容をおおむね達成できたと思われる。

がん教育は、主体的な学びを通して身につくものであるため、今後は、子ども達がめいちゃんやクラスメイトの役として劇を行うことによって、がんとの共存共生が自分事のように捉えられる授業になると考えられる。

謝辞

本研究にご協力いただきました児童のみなさんに感謝いたします。なお、本研究は科学研究費助成事業による「小児がんに着目した「がん教育」支援プログラム構築のための基礎的研究」（JP19K14304 代表：森口清美）と2018年就実大学・就実短期大学教育・研究・出版助成「小学校教諭及びがんの子どもを持つ親を対象にしたがん教育への意識調査およびがん教育支援ツールの作成（絵本）」（代表：森口清美）の研究計画の一部である。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省. 平成27年3月文部科学省「がん教育」の在り方に関する検討会
https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/__icsFiles/afieldfile/2016/04/22/1369993_1_1.pdf (2021. 10.20 閲覧)
- 2) 特別の教科 道徳編 小学校学習指導要領 解説
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_012.pdf (2021. 10.20 閲覧)
- 3) 文部科学省. 平成30年度におけるがん教育の実施状況調査の結果について.
https://www.mext.go.jp/content/20200218-mxt_kenshoku-000005036_1.pdf (2021. 10.20 閲覧)
- 4) 横山郁子, 浅田聖士, 藤本佳昭, 河内正二, 沼田千賀子 (2018) 中学生に対するがん教育の実施および生徒の意識変化, 日本緩和医療薬学雑誌11, 73-79
- 5) 助友裕子, 河村 洋子, 久保田 美穂 (2012) 小学校高学年を対象としたがん教育の実施可能性 ―教科等との関連および教師の考え方を中心とした検討―, 学校保健研究, 54, 250-259
- 6) 月本一郎 編. 小児血液・腫瘍疾患治療プロトコール集. 東京. 医薬ジャーナル. 2003.
- 7) 森口清美, 大見サキエ, 畑中めぐみ著 (2019) 「かがやけ めいちゃん」, ふくろう出版
- 8) エリクソン (2011) アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房
- 9) 若尾文彦 (2015) 日本のがん教育の現況と今後, 癌と科学療法, 42 (8), 920-923

- 10) 大見サキエ, 森口清美著 (2016) 「おかえり めいちゃん」, ふくろう出版
- 11) 大見サキエ, 安田和夫, 森口清美, 高橋由美子, 畑中めぐみ, 谷脇歩実, 宮城島恭子, 谷口恵美子, 河合洋子, 平賀健太郎, 堀部敬三 (2016) 小児がん患児の復学支援ツールの開発 小学生に対する試作絵本の読み聞かせ効果と活用法の検討, 岐阜聖徳学園大学看護学研究誌, 1(1) 3-15
- 12) 本多昭彦 (2018) 日本対がん協会のがん教育教材開発の取組み, 医学のあゆみ267(10), 797-799